

研究種目：萌芽研究  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19653015  
 研究課題名（和文） 現代イスラーム世界における〈共感される日本像〉形成パターン研究  
 研究課題名（英文） A preliminary-research on the image building of good looking Japan in the Islamic World  
 研究代表者  
 鈴木 規夫（SUZUKI NORIO）  
 愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授  
 研究者番号：70271468

## 研究成果の概要：

現代におけるイスラーム現象は、世界がナショナルなものユニットの集合体の構成物であるとするナショナリズムのフィクションを超え、「想像上の」一種の新たな普遍主義を構築しつつある。そのヴィジョンの中で〈日本〉はどのようなイメージを形成保持し、あるいはまた変化しうるのであるかという一連の総合的研究プロジェクトの予備研究である本研究は、新たに形成されつつある〈ヴァーチャル・ウンマ〉実態解明の端緒を見出した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	0	1,600,000
2008年度	1,500,000	0	1,500,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,100,000	0	3,100,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係

キーワード：イスラーム、イメージング、日本像、ムスリム・ネットワーク、ヴァーチャル・ウンマ、国際政治神学、「共感」、グッド・ルッキング

## 1. 研究開始当初の背景

かつて、日本が列強諸国と対抗して、ムスリムの多く居住する東南アジア、政治社会の少数民族問題や周辺領域問題構成上回族回民が重要な位置を占めていた東アジアへの、資源生産消費基盤の拡張と政治的影響力拡大を企図した 1930 年代からの一時期、外務省、文部省、陸海軍などの諸機関は、独自にそれぞれイスラーム研究に着手していた。日本帝国主義の影響圏の拡大という意味で欧米列強が最も怖れたのは日本とインドなど

で欧米帝国主義への反植民地主義独立運動を展開していたイスラーム諸勢力との結合であったが、1945 年の敗戦とともにそうした研究はいったん全面的に廃棄された。

今後の日本政治社会の持続的発展と資源生産消費基盤の安定的確保のためには、日本国内の労働力供給も含めて、ムスリム政治社会との広義のコミュニケーション濃度を高めていかざるをえない。過去におけるのと同じ失敗を繰り返さないためには、当該社会空

間のイスラーム的性格を了解していくと同時に日本自体がどのようなイメージを抱かれているのかその社会文脈的パターンを、政府機関だけでなく日本を基盤とする民間企業等も明確に把握しておく必要がある。

70年以上前の状況と著しく異なるのは、国際政治において軍事力による影響力の行使には限界があり、逆にメディアやトランスポートーションの急激な発達によって、ムスリム政治社会のネットワークの性格に著しい変化が生じていることである。実際、地域概念の物理的空間的制約から逃れて、たとえば、アルジェリアへの中国人労働者の流入がパリ・モスクを舞台に展開していることなどから考えても、アルジェリアのムスリムの抱く日本像が、中国回民のムスリムの抱くそれとどのようにリンクするのかといったような課題に依っていく必要が生じてくる。逆に考えれば、ムスリム・ネットワークを通じより積極的に〈共感される日本像〉形成を促進するようなさまざまな回路が世界中に存在するという点でもある。

以上のような問題認識に依拠しながら、本研究は、その予備的調査研究を開始することにしたのであった。

## 2. 研究の目的

萌芽的とはいえ、本研究は以下の諸点にそれぞれ一定の研究発展の契機を見出すことを目的としていた。

(1) 感性的機能を重視したイメージング機能分析の国際政治理論への応用可能性を探る。

(2) (1)の場合、イスラームの教義システムにおいてイメージングがどのように位置づけうるのかに関する理論的考察を深める。とりわけ、いわゆる「ムハンマド戯画問題」など、今後も錯誤によって起こりうるイメージングをめぐる諸問題への理論的対応への学術的蓄積を豊かにする。

(3) 宗教的ディスコースにおいて、「多神教」「神々のアミニズム」など、西欧近代の一神教ディスコースとの対抗的諸関係から生じ構成されてきた「神道」と「日本的なるもの」との短絡的關係について慎重に見直し、「日本的なるもの」のイスラーム言説との接合可能性について探究する。

(4) 環中華および環地中海という、比較的周辺のムスリム政治社会における日本像形成パターンを探ることを通じて、さまざまな異質な要素、とりわけ、日本像をめぐる「イスラーム規範」と「ヨーロッパ規範」や「中華規範」などの相互浸透、影響関係を探り、感性的により広範に受容可能な〈共感される日本像〉の拡張性を検証する。

(5) ムスリム社会にもさまざまなルートで浸透しているジャパニメーションなどの

受容状況調査を通じて、イメージング機能分析の一環としてのアニメーション・マンガ分析の他者理解への応用可能性について検証する。

## 3. 研究の方法

本研究の方法的関心の前提は、本研究代表者の国際政治理論研究における関心の機軸が、西欧近代政治思想におけるネーション概念とそれに基礎をおくネーション・ステイト・システムが、ポスト冷戦期以降どのような変容と展開を来したのかを解明していくことにあった。それは、従来時局に応じてナショナルなユニットを組み合わせ生成してきた、東西冷戦二極構造、多極構造論や第三世界論、単純化された宗教文明をユニットとする世界対立構図（「文明の衝突」論）などのような世界の構造的認識が、今後一体どうなっていくのかという問題でもある。

とりわけ、1970年代から漸次世界各地に浸潤していった〈イスラーム現象〉は、「文明の衝突」論的単純さを超えて、現代世界そのものの「イメージング」の大転換過程をさまざまに精査することを求めると同時に、そのための重要な視座を提供していた。

そこで本研究代表者は、〈日本人にとってイスラームとは何か〉と問うことから、「イスラームにおける中国」、さらに「イスラームにおけるヨーロッパ」へと重層的に往還し展開する試みを続けており、本研究課題である「現代イスラーム世界における〈共感される日本像〉形成パターン研究」は、そうした現代世界そのものの、イメージング転換過程研究の一環として位置づけられてきた。

現代におけるイスラーム現象は西洋近代とその帝国主義・植民地主義批判を基盤とするポスト・コロニアル状況の中から叢生しているが、それは世界がナショナルなもののユニットの集合体の構成物であるとするナショナリズムのフィクションを超え、「想像上の」一種の新たな普遍主義を構築しつつある。そうした普遍主義的ヴィジョンの中で、〈日本〉はどのようなイメージを形成保持変化しうるのか。その基本的なメカニズムを探ることによって、20世紀半ばに侵略の名の下に刻印されたナショナルな限界を超越して、イスラーム的文脈において如何に〈共感的規範的日本像〉を構築しうるのかを考究するため、以下のような方法によって、その予備的調査考察を試みた。

主に以下の三つのカテゴリーの領域についてそれぞれの手法を用い予備的調査は展開された。

第一カテゴリーでは、環中華ムスリム・ネットワーク（空間的には中国大陆および東南アジアの回民共同体ないしムスリム個人さらには欧米各地域の華人社会の中のムス

リム個々人ないしコミュニティへ)、および環地中海ムスリム・ネットワーク(空間的には地中海圏およびマグレブ、マシユレクアラブ、さらには欧米各地域のアラブおよびトルコやカビル等も含むムスリム・コミュニティへ)それぞれの〈日本像〉の現状とその現状が形成されてきた過去の文献資料などの調査を行った。もっとも、この調査が、予算の問題から極めて限定的なものに止まらざるをえなかったことはいまでもない。

さらに、それぞれのネットワークで消費循環されている〈日本像〉形成に関連すると考えられる各種メディアの「映像」素材を、物理的制約から、これも極めて限定的ではあるが、収集整理し分析した。フィールドワークの手法としては、むろん聞き取りも含むナラティブな要素やある種のアンケート調査も実施することがあるが、基本的に「イメージング」環境がどのようなものか、つまり当該各コミュニティにおいて、どのような〈日本像〉が具体的な感性を刺激するような「環境」を構成しているのかを軸に進められた。

さらにこの種のフィールドワークは、現地調査と同時に、「イメージング」機能が具体的に適用されていく場合が多いインターネット内のサイトを検証していく一連の作業過程をも含んでいた。むろん若干の研究補助者を使い行なえたとはいえ、本格的な規模でのフィールドワークは期待すべくもなかったため、どれほど信頼性のあるデータとして提示可能であるのかは疑問であるが、今後の調査研究の方向性を与える示唆は多くうることができた。

第二カテゴリーでは、第一カテゴリーのフィールドワークの水準を高め、インフォーマットとの共有知形成を促進するため、研究期間の比較的早い時期に、随時情報蓄積していくことのできるデータベース・システムを構築し、そこへ世界各地からアクセス可能なサイトを開き、ヴァーチャルな本共同研究の研究拠点を構築することであった。後述するように、これについては個人単独研究であるという基礎力の不足から十分な成果を上げえなかった。

第三カテゴリーでは、第一、第二カテゴリーでの研究進展に伴って、ムスリム・ネットワークで形成されている〈日本像〉の実態を把握し、それがどのようなムスリムの文化社会的文脈において適用しているのかなどの分析を加えながら、さらに一步前進して、ムスリム・ネットワークに、如何にさらにもっと〈共感される〉、グッド・ルッキングな〈日本像〉が構築可能かを検討した。このカテゴリーにおける研究では、ムスリム・ネットワークに着実に流通消費されうる、〈日本の理想〉シナリオを完成させ、その拡張を企図してさまざまなネットワークにフィードバ

ックしていくことを目標にしていたが、後述のように、その段階にまで至ることはかなわなかった。

#### 4. 研究成果

個々のフィールドワークと文献研究とによって得られた成果、それはあくまで、この萌芽研究が、今後より大きな規模の実証的研究の実施を促進し、新たな政治理論上の貢献を期待されるべき「契機」としての成果に留まる成果であるとはいえ、また、予備的研究という制約から、イスラーム世界各地を取材することによって期待された諸成果とヒューマン・ネットワークの構築は、ごく限定的なものにとどまらざるをえなかったとはいえ、以下のような諸点に要約しえよう。

(1) 近年のアフガニスタンやイラクなどにおける、日本の戦争への対米従属的関与傾向などによって、逡滅的傾向が存在するとはいえ、一般には未だに根強く存在する従来のイスラーム世界における日本像は、西欧帝国主義に対抗するアジア勢力として認識され(これを一般に「日露戦争勝利モード」としておく)ており、その後日本に侵攻を受けた東アジア以外の被植民地地域では共有されている感覚である。これを21世紀の世界情勢に相応しくより効果的な〈共感される日本像〉に再構築できれば、それが総合的な日本の安全保障に益することは明らかであり、また、その再構築によってもたらされる近親連帯感創出は、尊厳をもった国際社会における日本の、独自の位置と役割とを維持させることになる。この認識を確実に正確なものとするには、調査点数が不十分ではあるが、未だ人間の感性に係わりを持つイメージングの世界を通じて、ムスリム政治社会に〈共感される日本像〉(グッド・ルッキング)を再構築し、日系機関、団体、個人の諸活動が、ムスリム・ネットワークにおいて著しい誤解や偏見によるノイズを避けて、よりスムーズに展開される方法を探ることは、極めて有効であることが明らかになった。

(2) 従来は、華人ネットワークを、ムスリム・ネットワークの視点から分析することはあまりなかった。本研究では、サンプル数不十分ながら、これを明らかにし、中国を南北に繋ぐコミュニケーション回路を、ある程度明確にし、沿岸部にばかり着目してきた視点により積極的な転換をもたらす「契機」を与えた。寧夏銀川市と昆明市など何部がムスリム・ネットワークで繋がり、相対的にムスリム人口の少ない上海市などにおいても、諸外国と中国国内ムスリムとを結ぶ、媒介機能を果たしていることなどが、今後この成果に依拠しながら、いろいろ実証できるかもしれない。

何れにせよ、限定的ながら、制約の掛かっ

ている中国国内のネットにおける中国国内ムスリムのメディア受容状況下の〈共感される日本像〉形成パタンの検証については、いくつかの徴候をうることができたといえる。

(3) 現状の欧州社会では、移民としての華人コミュニティとムスリム・コミュニティとの、暗黙裏に緊張を含んだ関係が存在することが明らかになった。問題はこれをどのように平和的關係に組み替えていくのか、ということにある。その問題への手掛かりとして、今後とも、大量に海外流出していくことになる中国人労働者を、中東アフリカにおけるマン・パワー問題と関連づけ、環地中海ムスリム・ネットワークの存在をより明確にしていきながら、〈日本像〉をめぐって、欧州中東アフリカにおける日系機関、団体、個人の諸活動に、重層的なコミュニケーション回路を開く可能性を探ることは、さらに重要である。

(4) 環中華ネットワークと環地中海ネットワークは、それぞれのサーキットを構成しながら、相重なる隣接領域をもつが、本研究によって、それを担っているのがムスリムのネットワークであることがより明確になった。翻って、湾岸諸国や東南アジアにおける日本外交や企業活動などの諸施策立案に、これは重要な要素となる。環中華および環地中海のムスリム・ネットワークの接合部分を探査することを通じて、〈日本像〉が伝搬される回路を探り、相互の影響関係の一端を探ることができた。もっとも、このサンプルもあまり十分なものであるとはいえない。

にもかかわらず、地中海圏におけるムスリムによる日本イメージ形成に特徴的なファクターと中国ムスリムにおけるそれとの一定の差異と相関を、限定的とはいえ考究できたことは非常に意義深いものがあり、今後のこの分野における研究に一定の手掛かりをえたといえる。

(5) 今回の研究ではほとんど着手できなかったが、日本社会におけるイメージングの世界を通じた〈共感されるムスリム像〉の構築可能性を探る、といったプログラムを開発することができれば、アメリカの世界戦略の一環として派生した、ムスリム過激派のテロ(〈アメリカン・ジハード〉—マフムード・マムダーニ)と、それがもたらす現代世界におけるムスリムへのネガティブなイメージを、相対的に緩和させていく役割を日本が担うことによって、日本の国際社会に占める位置をさらに高め、確固としてものにしていく可能性があり、同時に、それは普遍性へ開かれた、日本人アイデンティティの獲得に繋がるといえる。

その他、副次的な成果として期待された、

国際政治学における〈イメージング〉の理論化は、処理すべき情報量の多さから、さまざまな困難が新たに明らかになった。

また、いわゆる、現代イスラーム改革思想潮流のなかにおける〈日本像〉をめぐる議論の整理については、その一事例として1940年代にエジプトのムスリム同胞団が、反英闘争のために日本と連帯しようと、組織メンバーを、東京に派遣する計画であった云々といったディスコースが、どのように構築されたのかについて探っていくうちに、もともとの、近代日本へのイスラーム圏におけるポジティブイメージ形成過程そのものに、さらに興味深い契機が含まれていたことが明らかになった。これは近代日本における神的概念の形成史にも関わる、重大な問題を孕んでいるが、その詳細を展開するには、他日を期したい。

さらに、中国語圏のウェブ上におけるムスリム・ネットワークの諸動向について、調査するうちに、当然のことながら、中国国内の諸動向におけるムスリムの反応について、いくつか、実に興味深い傾向のあることに気づいた。これも量的な調査検討をさらに加えて、一定の分析結果を抽出する機会を待ちたい。また、よりリングフランカ化しているウェブ上における英語系ムスリム・サイトにおいて、ナショナルな契機を、どのように見出しうるのかについても、さらなる調査を必要とすることが明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 3 件)

### ①鈴木規夫

中国少数民族問題を解く—〈イスラームにおける中国〉の視座から—、国際アジア共同体学会第一回国際学術大会報告、2008年11月2日

### ②Suzuki Norio

Ambiguity of pilgrimage in Japan: On Shinobu Orikuchi's interpretation of *Hokaibito*, Lourde CONFERENCE: Les Pèlerinages : Parcours historiques, parcours croyants, parcours géographiques Pilgrimages : historic routes, believers' circuits, geographical pathways VENDREDI, 19 SEPTEMBRE 2008

### ③鈴木規夫

鏡としてのマイノリティー政治と宗教とを  
めぐる日本とフランスとの比較研究―、政治  
と宗教研究会、2007年4月26日、東洋哲学  
研究所

〔図書〕(計 2 件)

①鈴木規夫

現代イスラーム現象―その恐怖と希望―、  
国際書院、2009

②鈴木規夫

光の政治哲学―スフラワルディーとモダン  
―、国際書院、2008

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者：

鈴木規夫 (SUZUKI NORIO)  
愛知大学・国際コミュニケーション学部・教  
授  
研究者番号：70271468

(2) 研究分担者：

なし

(3) 連携研究者：

なし